

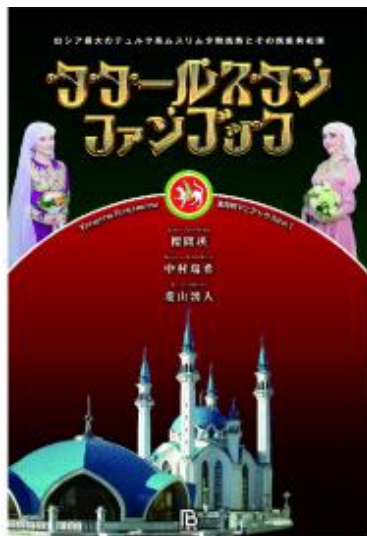
【書評・紹介】

櫻間瑛・中村瑞希・菱山湧人 著

『タタールスタンファンブックーロシア最大のテュルク系ムスリム少数民族とその民族共和国ー (連邦制マニアックス Vol.1)』

(東京, パブリブ, 2017 年 12 月, 四六判, 224 頁, 2,200 円+税)

櫻間 瑛



本書は、ロシア連邦内に主に居住するタタール人及びその名を冠した民族自治共和国であるタタールスタン共和国を、一般の人々に広く紹介する目的で、若手研究者3名が執筆した。

ここで先にタタール人とタタールスタン共和国について簡単に紹介しておきたい。タタール人とは、副題にもある通り、ロシアの中でも最大の少数民族であり、言語的にはテュルク系で、その多くはスンニ派のイスラームを信仰するムスリムである。このタタール人が多く居住するヴォルガ河の中流域に位置するタタールスタン共和国は、ロシアの首都モスクワから約 800 キロメートルに位置し、その中心都市は「ロシア第 3 の都」とも呼ばれるカザン市である。人口は約 400 万人で、内約 200 万人

がタタール人、約 150 万人がロシア人で、タタール人が過半数を占めている。共和国内では油田が存在しており、その開発と石油精製・加工業が発達している他、穀物や野菜の生産を中心とする農業も盛んであり、ロシア国内でも比較的恵まれた経済状態にある。また、政治的にはソ連崩壊直後より比較的大きな自治の獲得に成功しており、現在も連邦構成主体で唯一首長に「大統領」という名を冠し、民族語教育に力を入れるなど、有力民族共和国としても知られている。

本書では、このタタール人及びタタールスタン共和国の社会や文化、政治・経済について、総論的にまとめたものとなっている。大まかな構成は以下のようになっている。

1. 基本情報

共和国の基本情報や地方区分、交通手段の紹介

2. タタールスタンの首都カザン

共和国の中心としてであるカザンの概要と、見どころとなる場所の紹介

3. タタールスタンの各地域

カザン以外の観光地や主要都市についての紹介

4. タタールスタンの生活と社会

タタール語の現状、タタールの間でのイスラームのあり方等についての紹介

5. タタールの芸術・文化

タタールの文学、音楽、民族衣装、食文化、祭りの紹介

6. タタールスタンと民族

タタール人とそのサブグループ、またタタールスタン内に居住する他の主要民族の紹介

7. タタールスタンの歴史

ロシア征服以前、ロシア帝政期、革命期、ソ連期、ソ連崩壊期に区分してのこの地域の動向の概説

8. タタールスタンの政治と経済

タタールスタンの政治体制及び経済状況の概説

9. タタールスタンと日本

タタール人と日本との関わり、特に文化交流の歴史と現状の紹介

第1部～第3部は、『地球の歩き方』などを念頭に入れつつ、当地を訪れる読者が観光ガイド的に利用できるよう、見どころなどの解説を配置している。もっとも単なる紹介に留めるのではなく、そこからこの地域やタタール人の歴史・文化についての知識に触れられるような記述となるよう配慮している。一方、第4部以降については明石書店の『エリア・スタディーズ』を想定しつつ、民族・地域を理解する上で重要と思われるトピックをそれぞれまとめつつ配置する形となっている。

このように包括的かつ概論的な構成とはなっているが、筆者としては（明示はしていないものの）以下のような3つのテーマに特に力を入れた内容になっている。

1. 少数民族言語であり民族的アイデンティティの源泉としてのタタール語の現状
2. 無神論を経て再興しているイスラームのあり方
3. 独立ではなく、連邦制の中の自治による民族的自己主張のあり方

まず、1. のタタール語については、そもそも私以外の筆者2名がタタール語を主な研究対象としており、自然とそこに力点が置かれることとなった。それと同時に、実際にタタール人やタタールスタン共和国自体も、タタール語を民族的アイデンティティの核としており、教育などを通じてその浸透・維持に務めている。本書の中では、特に第4部の中でタタール語の言語的特徴を示すとともに、その教育や促進活動の現状について詳しい解説を付した。と同時に、本書全体を通じて重要語句等については、極力ロシア語とタタール語をつけるようにした。また、巻末にはロシア語・タタール語の簡単な会話帳もつけ、タタール語という存在への導入となるようにも配慮した。

2. のイスラームに関しては、私自身の関心ともつながったものである。本書で取り上げたタタールスタン共和国を含むヴォルガ中流域は、多民族・多宗教の共存地域として知られており、ロシア正教徒やムスリムが同じ空間の中に暮らしてきた。さらに、ソ連時代には無神論が標榜されたことで、人々の生活と宗教の乖離が生じていた。しかし、ソ連崩壊後に宗教復興の潮流が現れるようになり、国外からの宣教団の影響などもあって、宗教に対する態度に世代や地域などの間での分断も生じるようになっていく。こうした背景の元でのイスラームの多様なあり方を示すことで、一般に膾炙している「イスラーム＝過激主義」といったイメージの再考にささやかでも寄与することを目指した。

3. の連邦制と民族的自己主張との関係については、国家としての独立が民族としての独自性を維持する唯一の方法とは必ずしもいえない、ということを示すことに重きを置いた。

本書執筆にかかる前年 2014 年に起きたウクライナ危機の際には、クリミア・タタールの運動と連動して、タタールスタンも独立運動が活発化する、という言葉が広まっていた。しかし、実際にはタタールstanはロシア国内の一自治共和国として、積極的にクリミアのロシア併合を仲介する役割を引き受け、逆説的に連邦内での自治権を確保する姿勢を示した。こうしたあり方について、歴史的、政治的な背景を示すことで、多民族国家の中の少数民族としての自己主張の可能性について考えるきっかけとなることを目指した。

冒頭にも書いた通り、本書は著者が研究対象としている地域・人々を紹介することを目的としている。と同時に、これは現地社会への貢献にもなると考えている。執筆者が、現地のメディア関係者と親しかったことなどもあり、本書刊行の知らせはすぐに現地でもニュースとなっている。まだ現地に現物が渡ったわけではなく、そもそも本書が日本語で書かれているため、その内容を彼らが精査できるわけでもないが、少数民族として、それを代表する民族共和国として、これまで知名度が高いわけではなかった彼らの存在を示したという点のみを取っても、歓迎されるものと認識されている。

本書に関して、出版後に改めて見直してみると、いくつかの反省点も目につく。まず、一般読者を対象にしていることを強く意識したために、全体に平板かつ図式的な説明になってしまっている感は否めない。特に歴史の理解については、紙幅の問題もあり、かなり広範な時代・対象に対して、極めて概括的な記述しかできず、その中で生じている細かな問題やニュアンスを十分に伝えるには至っていない。また、『北海道民族学』の読者の方々からみると、民族誌的な情報については大いに不満を持たれるような内容かとも思われる。特に、年中行事や冠婚葬祭など、民族学・人類学的な観点から必須と思われる情報について、ほとんど言及できていない点は、今になって見直すとかなり大きな失敗であったと考えている。やや言い訳をすれば、筆者以外の2名は言語を対象として、民族誌的なフィールドワークには従事しておらず、筆者はフィールドワークをおこなったものの、主要な対象はキリスト教徒であり、本書が主要な対象と想定していたムスリムの事情については、十分な知見を持っていないという事情がある。また、民族文化についての紹介についても、教科書的な説明に終始している点も、読者には不満に思われるかもしれない。例えば音楽や食文化について、ロシア文化との融合や現代的なアレンジなど、同時代的な様相についてより詳しい解説を入れていけば、少数民族の現在の生活の複合的な様子もよりわかりやすく紹介できたかもしれない。もっとも、本書が一般書であることに鑑み、読者の中からこうした不足点を乗り越えるような研究に取り組む方を生み出すきっかけとなれば本望だと考えている。

こうした不足点は見受けられるものの、一般書として全体を見渡せば、まずまずの出来ではないかと自負している。特に写真を多く掲載し、かつオールカラーとなっている点は、すでに本書を手にとった方の感想を見ても、とても好意的に受け止められている。この点については、そもそも本書の企画を提案してくださり、レイアウトまで作成してくださったパブリック代表の濱崎誉史朗さんの力量によるものであり、この場を借りてお礼申し上げたい。濱崎さんには、本書の原稿執筆中も、様々な観点からの助言をいただき、筆者としても学ぶところが多かった。

本書は、「連邦制マニアクス1」と書かれているように、今後ロシア各地の連邦構成主体やその他連邦制を採用している国の自治共和国などを取り上げた続編の可能性も視野

に入れられている。こうした、普段人々が接する国際ニュースなどでは、なかなか取り上げられることが少ない地域や人々について、一般向けに解説するものが、より多く世に出ることで多文化共存などについての理解がより進むことを祈っている。

(さくらま・あきら／日本学術振興会 特別研究員)